

心の窓を開いて

香芝市立香芝中学校 2年 小池 悠月

私たちは学校生活や日常の中で、数え切れないほどの言葉をかわしています。最近は SNS の普及もあり、短いスタンプやテンポの良さばかりが重視されている気がします。効率よく気持ちを伝えられることは便利ですがその一方で、相手の気持ちを深く想像する大切な時間を、少しずつ忘れてしまっているのではないのでしょうか。

私たちは自分と周りの違いを見つけると、途端に不安になることがあります。周りの視線が気になり、みんなと同じように振る舞って自分を守ったり、自分の考えを引っ込めて周囲に合わせてしまったり、そんな経験は私だけではないはずです。そうして本心を隠していると、一見うまく付き合えているようでも、家に帰って一人になったとき、心のモヤモヤとした気持ちが残っています。自分の枠に当てはまらないものを変だと言で片付けるのは簡単です。でも、それではいつまでも本当の意味で人と繋がることはできません。

この違いを怖がる気持ちは、日本を訪れる外国人に対しても同じです。すれ違うときの見た目や、聞きなれない大きな話し声に圧倒され、私は言葉が通じないからと言っては目をそらし、勝手に心の壁を作って遠ざけていました。

そんな自分を変えるきっかけがあるとき訪れました。駅のホームで思い切って「ハロー」と声をかけ、道を案内する機会があったのです。画面を見せ合い、身振り手振りで必死に伝えたとき、私の勝手な思い込みは一瞬で消えました。彼らは「アリガトウ」と満面の笑みを浮かべ、私の言葉に一生懸命耳を傾けてくれる、温かい人たちだったのです。言葉も文化も違う環境に飛び込んでいく行動力が、すごいなと尊敬するようになりました。

その後、電車の中で静かに座っている外国の方を見かけた際、私はハッと気づきました。怖い、不安だと感じていたのは、私だけではなかったのだと。言葉も通じない見知らぬ環境で、周囲から浮いてしまっているのではないかと、張り詰めた緊張感の中で不安を抱えていたのは、相手の方だったのかもしれない。お互いが怯えて心を閉ざしたままでは、世の中にある見えない壁は、いつまでも消えないままです。

この違いを恐れて壁を作ってしまう弱さは私の日常の中にもありました。今、私は心も体も大きく変化する思春期の真っ只中にいます。時には親や友達と意見がぶつかり、言い合いになって悔し涙を流すこともあります。それでも、自分の本心を誤魔化さずに最後まで伝えられたときは、胸がずっと軽くなり、前を向くことができたと感じました。ただ感情をぶつけるのではなく、自分の考えを自分の言葉で冷静に伝えること。それは、周りの空気に流されるだけの自分を卒業し、一人の人間として自立していくために大切な一歩なのだと思います。

誰かと衝突をすることを恐れて個性を隠したり、違う存在を遠ざけたりすることは、一見簡単なことです。しかし、それは相手を深く知ろうとする一歩を自分から止めてしまっているのだと気づきました。

私は今でも、自分の意見をはっきり伝えることに勇気が必要なときがあります。明日また、言葉の通じない誰かがいたら、一瞬足がすくんでしまうかもしれません。それでもこれからは、見た目や思い込みの枠にとらわれず、まずは目の前にいる人を一人の人間として見つめることから始めたいと思います。お互いの違いをおもしろがり、自分の言葉で気持ちを伝え合えるようになったとき、誰もが自分らしく安心して息ができる社会だと私は思います。私もこれが自分だと言えるように、一歩ずつ前に進んでいきます。